

病 害 虫 速 報 No. 6

県内のほぼ全域で、イネ縞葉枯病の発生が認められています！ 収穫後の本田の耕起を徹底しましょう！

[現在の発生状況]

- ① 平成26年8月上旬に、県内57ヶ所の水田においてイネ縞葉枯病の発生状況を調査した結果、鹿行地域を除く県内全域で本病の発生を確認した（図）。
- ② 8月上旬における県全体の発病株率は5.9%（平年0.4%）、発病度[※]は1.5（平年値0.1）であり、過去11年中で最も高い（表）。
- ③ 県西地域では、発生地点率が89%、発病株率が25.3%、発病度が6.4といずれの値も県内で最も高く、本病が多発している。
- ④ 県南地域の発生地点率は37%と昨年の約7倍となり、本病の発生が急激に増加している。
- ⑤ 昨年まで発生を認めていなかった県北及び県央地域の発生地点率は、それぞれ13%、20%であり、発生地域は拡大している。

※）発病度：発病の程度を評価する数値、最小値は0で、最大値は100となる。
発病指数 0：無発病，1：発病茎率30%以下，2：発病茎率31～60%，
3：発病茎率61～90%，4：発病茎率91%以上
発病度 = $\sum (\text{発病指数} \times \text{株数}) \times 100 \div (\text{調査株数} \times 4)$

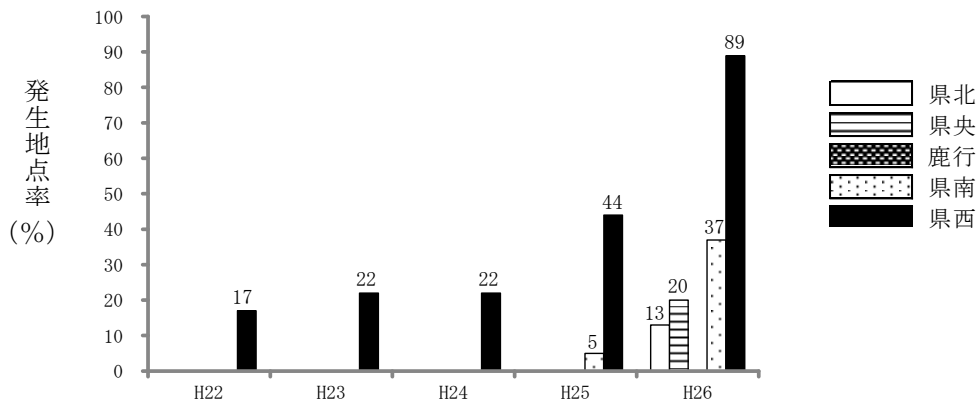


図 8月上旬における水田でのイネ縞葉枯病の発生地点率の推移

表 8月上旬における水田でのイネ縞葉枯病の発病株率及び発病度

調査地域 (地点数)	発病株率 (%)		発病度	
	平成26年	平年値 ¹⁾	平成26年	平年値 ¹⁾
県北 (8)	0.5	0	0.1	0
県央 (15)	1.3	0	0.3	0
鹿行 (6)	0	0	0	0
県南 (19)	2.3	0.0	0.6	0.0
県西 (9)	25.3	1.9	6.4	0.5
県全体 (57)	5.9	0.4	1.5	0.1

1) 平年値：過去10年（平成16年～平成25年）の平均値

[病害の特徴]

- ① イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。ヒメトビウンカは、感染株を吸汁すると体内にウイルス（イネ縞葉枯ウイルス：RSV）を獲得（保毒）し、他の健全な稲株を吸汁する際にウイルスを感染させる。
- ② イネは RSV に感染すると、生育初期では分げつが枯死して欠株となり、出穂期では穂が出すくんで籾が奇形や不稔になるため、**本病が多発すると減収する**。なお、本病に感染した後の治療方法はない。
- ③ RSV は、ウイルスを保毒したメス成虫から卵を経て次の世代に伝染する。また、本病の発生が多い地域ではヒメトビウンカが感染株を吸汁して新たな保毒虫が発生するため、保毒虫率が高まる。

[防除対策]

- ① ヒメトビウンカは、秋季、本田に残った再生イネ（ヒコバエ）およびイネ科雑草で増殖する。本病に感染したヒコバエ（写真）が多いと保毒虫率が高くなり、翌年の多発を招く恐れがある。このため収穫後は必ず圃場を耕起し、ヒコバエやイネ科雑草を残さない。
- ② 秋季から冬季にかけては、ヒメトビウンカの越冬場所となる畦畔等のイネ科雑草を減らすよう努める。
- ③ 飼料米やコシヒカリ以外を栽培する場合は、積極的に縞葉枯病抵抗性品種を導入する。
- ④ 来年の作付けの際、ヒメトビウンカに対して効果持続期間の長い薬剤を用いて育苗箱処理を行う。本年、育苗箱処理を行ったにも関わらず被害が大きかった地域では、6月下旬～7月上旬の本田防除との体系防除も有効である。

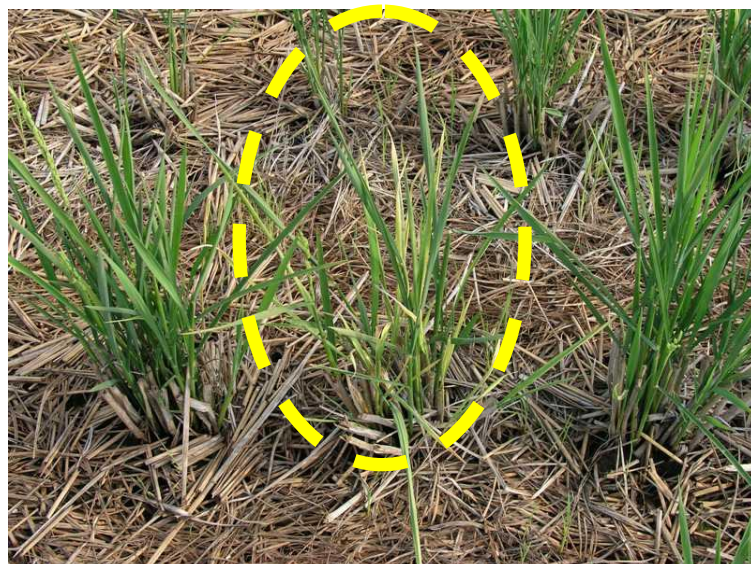


写真 ヒコバエ（再生イネ）での発病株